

バスケットボール競技におけるアンダーカテゴリーの国際ルールと国内ルールの比較

— マンツーマンディフェンス推進の評価と問題点 —

荒木 直彦¹⁾・松尾 晋典²⁾

1) 倉敷芸術科学大学生命科学部 2) 広島文化学園大学人間健康学部

(2019年10月1日 受理)

はじめに

公益財団法人日本バスケットボール協会（以下 JBA と称す）は、国際バスケットボール連盟（以下 FIBA と称す）の統括する国際バスケットボール連盟アジア（以下 FIBA ASIA と称す）に所属する、日本国内すべてのバスケットボール競技を管理、運営する組織である。2020年開催予定である東京オリンピック、またそれ以降の競技普及・発展を目指し、各カテゴリーと競技団体の管理体制や運営方法の改善に務めている¹⁾²⁾。特に、選手の育成に力点を置き、一環育成システムの構築を進め、近年では教育的配慮等から各国のそれぞれに設けられていたアンダーカテゴリーに関する競技規則においても、統一した運用がなされるようになった。JBA では、2015年より U15 以下でのマンツーマンディフェンスの推奨（ゾーンデフェンスの禁止事項）を実施し、FIBA U14 の定める規則の徹底を図っている⁴⁾。日本国内におけるバスケットボール競技の強化育成策として、このマンツーマン推奨事業に着目し精査を進めたところ、発育発達期におけるバスケットボール競技者、とくに本格的な学習を始め、習熟度に差がでるといわれる U12（小学生以下）に関する検討を試みた。

特に球技と呼ばれるスポーツに必要とされる空間認知能力は、ボールの位置や人の数と配置、さらには経過する時間との関連など、マンツーマンディフェンスとゾーンデフェンスの区別に関係なくバスケットボール競技に必要であり、そして個人の技術を複数で連結させることに重要な役割を担っていると考えられている。U12 世代における視空間認知能力の把握と育成プログラムの関係を調査することで、JBA の推奨するアンダーカテゴリー強化育成プログラムの効果と懸念事項を検討した。

FIBA と JBA での U12 カテゴリーの関係性

FIBA では、バスケットボールを楽しむことを理念とし、コーチはもちろん選手に携わる様々な環境の整備（規則含む）を進めているが、ゾーンデフェンスの禁止規則は 14 歳以降もバスケットボールを続けることが前提と捉えられるルール設定である。カテゴリーが上がるにつれ、その技能も段階的に上がる。多くの国と地域が FIBA と同様、もしくは類似した競技規則と育成カリ

キュラムを導入している。

JBA では、日本国内の教育機関に依存した運営を変え、2024 年までに一貫育成指導体制を構築し、世界基準への到達を主眼に置いた取り組みを優先している。これは FIBA 加盟国協会として 2014 年 11 月に資格停止処分を受けて以降の FIBA 主導による「JAPAN TASKFORCE」設立による影響が大きいものであるが、様々な補足や変更を加えて 2016 年 4 月より競技での実施を展開している。育成世代と呼ばれる U15 の子供達にマンツーマンディフェンスを推奨し強化育成を図り、かつ、楽しみやバスケットボールの文化的価値の向上を目指すものであるが、現時点では実施期間が短く、自己評価等の検証方法が確立されていない現状から、この強化育成の成果を確認することは出来ていない。また、同時に国内での活気あるバスケットボール文化を提唱しているが、選手のパフォーマンスに制限を加える形の指導体制の対象となる者への配慮に欠ける点が懸念される。

文部科学省の報告と視空間能力

学校教育現状 小学生の発達障害児・学習障害児の年次増加が確認されており、40 人クラスに 2 人から 3 人がそれらの傾向があるとの報告がある。発現率は男子が女子に対して 5 倍である。義務教育下では、小学生は中学生の 2 倍の事例が確認されており、学習や学校生活の習慣化に伴い是正、減少する傾向があると報告されている。これらは医師の診断結果に基づくデータではなく、学校現場の教師（担任等）による判断からの報告であるため、診断としての障害ではないが、学習に関して何らかの問題を抱えている児童が確実に存在することを示している。また、学習障害（LD）の学習到達度は 1 年から 2 年遅く、併せて、発達障害（ADHD）と LD には視空間認知力に乏しいものが多く含まれる。

考 察

懸念事項：バスケットボール競技における 14 歳以下へのゾーンデフェンスの禁止規則は、これらの子供たちを排除してしまうことに当たらないのか。

10 人に 1 人は所属する可能性のあるこれら選手は、ゾーンデフェンスとマンツーマンディフェンスの違いを正確に理解し、実践できるのであろうか⁸⁾。

特殊な戦術として、日本国内で 2015 年に導入されたゾーンデフェンスの禁止規則を受けて、いわゆる「差異が理解・実施できない」選手に対して、その選手にはデフェンスさせない、バックコートに戻らせない指示、戦術を採る可能性も示唆される⁴⁾⁵⁾⁶⁾。

本格的な学習を始める時期に当たる児童期（小学生）における発育・発達度の差異は、スキヤモンの発育発達曲線等を根拠に様々な配慮が必要であるが、強化育成といった方向性のみで検討されるべきではないと考えられる。先述したように、学習速度や理解度の個人差は、重度の ADHD や LD を除いた場合においても、学校教育機関での在籍が確認されている⁸⁾。このこと

は、JBA の推奨するマンツーマンディフェンスの推奨と深く関連しており、その推進に伴う禁止事項の理論的理解と実践を困難にさせる要因のひとつとなりうると考えるものである⁹⁾。

いわゆるゾーンの形式を制御する目的で設けられた規則、ディフェンダー個々のマッチアップエリアでのピックアップ、ヘルプポジションやオフボールポジションに関する制約、ヘルプローテーション、スイッチ、それに加え、ゾーンディフェンスへの理解等、指導や選手自身の理解において、とくに視空間認知力の発達に乏しい子供達への配慮といった取り扱いが欠落している³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

発育発達速度の差異が視空間認知力の分野で確認される子供は、地図を見て自分の位置を確認したり、これから向かうであろう目的地に進むことが困難であるとか、目標物と自分、または他人との位置関係や距離感といったものが理解、把握できない⁹⁾。このような子供達がチームに所属する場合、どのような指導が適切であるのか。発育発達期のプレゴールデンエイジ・ゴールデンエイジと考えられている世代に身体機能やバスケットボール競技における技能だけのカテゴリーは、現状ではすべてのバスケットボール競技に取り組んでいる育成世代にとって、不十分な施策であるといえる¹⁾⁷⁾。

今後の調査を進めるに当たり、以下の事項を踏まえながら、バスケットボール競技に取り組む育成世代の環境整備、ならびに指導者への指針を確立できると考えられる。

まとめ

1. 強化育成における JBA の責務と対象となる世代への責任の範疇を明確にする。
2. ADHD・LD とされる育成世代への対応を明確にする。
3. 視空間認知能力の発達過程にあわせた強化育成・普及プログラムの検討。
4. 視空間認知力とバスケットボール競技の科学的関連性に基づく指導体系の確立。

以上、これら項目を整理、精査することにより、JBA の推奨する強化育成事業と普及の均衡が取れるものと推察される。

参考文献

- 1) International Basketball Federation Official Rules - Valid as of 31st January 2019 2nd Edition (v1.1)
- 2) FIBA タスクフォース「JAPAN TASKFOCE 2024」International Basketball Federation Feb.28.2015
- 3) 15歳以下でのマンツーマンディフェンス推進について 公益財団法人日本バスケットボール協会 2015年8月12日
- 4) 15歳以下のマンツーマンディフェンス推進・実施について 公益財団法人日本バスケットボール協会 2015年12月17日
- 5) マンツーマンディフェンスの推進について（通知） 公益財団法人日本バスケットボール協会 2016年2月23日
- 6) マンツーマンディフェンス推進における変更点について 公益財団法人日本バスケットボール協会 2019年3月17日
- 7) アンダーカテゴリー（15歳以下）におけるマンツーマン推進の趣旨 公益財団法人日本バスケットボール協会
www.japanbasketball.jp/players_development
- 8) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 2012年12月5日
- 9) AR を用いた空間認識力向上のための学習方法 秦野真衣他, 研究報告数理モデルと問題解決 (MSP) 2012-MSP-87 33 巻 2012年2月23日

The relation between the rules of the International Basketball Federation and the Japan Basketball Association

— The evaluation and the regulatory issues of the man to man promotion —

Naohiko ARAKI¹, Shunsuke MATSUO²

¹Faculty of life science, Department of Health and sports Science

²Faculty of Human Health,

¹Kurashiki University of Science and the Arts, 2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama, 712-8505, Japan

²Hiroshima Bunkagakuen University, 1-1-1 Manabinooka, Gouhara, Kure-shi, Hiroshima, 737-0182, Japan

(Received October 1, 2019)

The purpose of this study is to make clear the treatment of basketball rules for the handicap children, especially the players have less or lower visuospatial cognitions. Authors are concerned about the player's understandings of the difference between the man to man defense and the zone defense that it is also difficult to make a distinction them in JBA promotions.

The results as follows:

- (1) JBA has not any programs about the visuospatial cognitions. The evaluation and the regulatory issues of man to man promotion structured only focused on the basketball skills.
- (2) The promotion require to support as ADHD, LD who has less or lower visuospatial cognitions.
- (3) Developing a scientific approach between basketball skills and the visuospatial cognitions are necessary to build up the power of competition of basketball.
- (4) Improving the evaluation and the regulatory issues of the man to man promotion for the player's growth and development anticipates to increase the population of basketball.